浄信寺通信

令和　５年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL（〇五二）五六一一一七三六

頒布価格年　千三百円
（檀信徒会費）

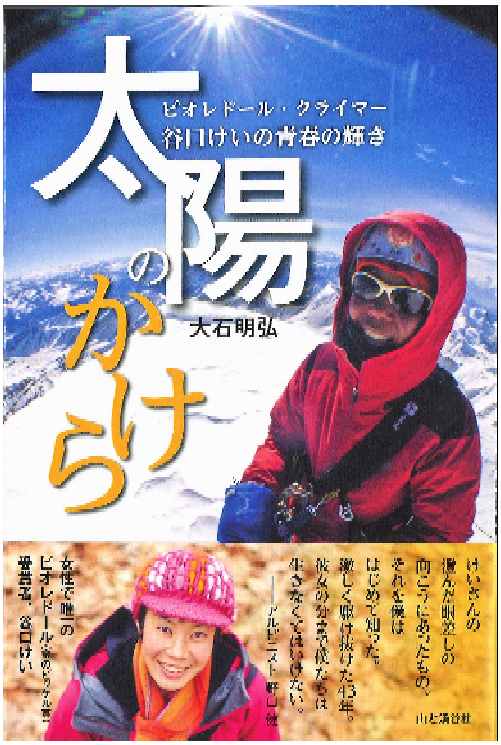
『太陽のかけら』

大石明弘著

「生死一如（しょうじいちにょ）」

生きるということと、死ぬということは、紙の表と裏のように切り離せない関係（一如）の仏教の言葉

本人曰（いわ）く「山を登る旅人」**谷口けい**。二〇〇八年に、インドのカメット（7,756m）に未踏の新ルートからアルパインスタイル※で登頂し、ペアを組んだ平出和也氏と共に、優れた登山家に贈られる国際的な賞。登山界のアカデミー賞ともいわれる「ピオレドール賞（フランス語で「金のピッケル」）」を受賞した最初の女性受賞者であった。



※　アルパインスタイル
本来は“ヨーロッパアルプスでのクライミング”という意味。登山とクライミングを合わせ持ち、ロープや道具を駆使して、高度な登山テクニックが必要とされ、極めて難易度が高い登攀スタイルの事。
※　写真は「太陽のかけら」（山と渓谷社(2018/12/17)）からキャプチャー。

その谷口けいさんが、二〇一五年十二月二十二日。北海道上川町の大雪山系の黒岳（くろだけ）で、頂上付近で「**お花摘み**」（登山用語でトイレにいく事）に行こうと、４人の仲間からのロープを外し、一人岩陰へ雪道をかきわけ、危険な足場に気づかず、岩場に頭部をぶつけ滑落（かつらく）した。死因は「脳挫傷（のうざしょう）」だった。世界の未踏峰（みとうほう）の峰々を制覇（せいは）した世界屈指のアルピニストのあまりにも「**あっけない最期**」だった。小学生の頃に植村直己氏の著書に出合い、彼女の生き方の指針となった植村氏と同じ四十三歳の生涯であった。

多くのクライマーが、谷口さんの生き方や言動に魅了（みりょう）されて強い影響を受けた。クライミングパートナーであった大石明弘氏も、そのひとりだった。本書は、けいさんの足跡を、彼女の日記や、関わり持った人々を精力的に取材して綴（つづ）った、短くもパワフルで光り輝いた人生を駆け抜け抜けていった、一人の個性あふれる女性の回顧録である。

■　■　■　■

けいさんは、一月にグアム島で元日本陸軍兵の横井庄一氏が、発見された一九七二年（昭和四七年）に、和

平和公園墓参のご案内

日時：８月１２日（土）
　　１３日（日）

午前８時頃～午後１時頃

※人との出会いを大切にしていた。

歌山県和歌山市に生まれた。その後千葉県我孫子市に移り住み小中学校時代を過ごした。同級生の多くが強烈な印象はもたなかった。静かで目立たない生徒であったと語っている。

千葉県の小金高校に入学して、その学生生活の抑制された閉塞感から、二年の夏からアメリカカンザス州の高校に留学した。けいさんが、語るには一年間の留学中一人の日本人にも出会わなかった。親元を離れて異文化のなかで、自ら判断し、行動し、自分の進路・人生を考える機会を得た。アメリカカンザス州の自転車レースにも参加するなどして、内に秘められた活発な性格が次第に花ひらいていった。

帰国後、父親の尚武氏に送った手紙には、（「太陽のかけら」二三頁）

「高校時代は幸せだった。毎日が平和で、朝起きて、学校行き、夕方帰ってくればよかった。もう二度と高校生活に戻れない、・・・・あんな狭い世界の中でなんか生きちゃいけない、なんで学生は、あんなに平和に笑っていられるんだろう。

フツーて、どういうことか考えてことある？フツーの生き方て何だと思う。・・・・いったい、**何の為に生きているかってことを**、みんな本当に考えたことがあるんだろうか、自分が人間なんだってことを思い起こすことがあるんだろうか。それからこの地球に生きているものは人間だけじゃないんだってことか、人間の未来の姿とか、色々考えているのかな。・・・・」

帰国後、一人の卒業式で卒業証書を受け取り。東京大学法学部卒で大手鉄鋼メーカーに勤務の父と、ディスプレイデザイナーの母の実家にはなじむ事ができず、家を出て自立する道を選んだ。仏教的には、正しく出家。**出家**したからには、親からの金銭的援助は受けずに、北綾瀬の四畳半一間のアパートで、生活費をアルバイトで稼ぐ生活を始めた。学費を貯めて１９９３年（二十一歳）植村直己氏と同じ明治大学の二部文学部史学地理学科に入学した。昼はアルバイト、夜は講義を受ける大学生活を送る。大学では、山岳部とはソリが合わず、サイクルツーリングクラブに所属し自転車で日本ばかりでなく、モロッコ・ニュージーランドなど海外にまで自転車で旅をした。大学を出て、広告会社に一時就職したが、アルバイト時代からの交友関係仲間を誘い山行きや、アドベンチャーレースにも参加するようになる。数年で会社を退職して、京葉山岳会に入会して、クライマーとしては遅咲きの２８歳から本格的な登山技術を習得し、実績を重ねていった。

その翌年の２００１年植村氏が遭難したアラスカのデナリ（6193m）に登頂。それ以後日本を代表する登山家の仲間とザイルを結び、エベレスト・マナスル・ゴールデンピーク（7,200m）・ライラピーク（6,200m）・シブリン（6,543m）・カメット（7,756m）の高峰を極めた。そして前述したように二〇〇八年第十七回ピオレドール賞を受賞した。その後亡くなる七年間の間には山岳ツアーリーダー、山岳連盟レスキューリーダー、日本山岳協会自然保護指導員、国立登山研修所講師など山岳関係の仕事を精力的にこなして、多くの人々と交友を深めた。

■　■　■　■

毎年有名・無名を問わず、山を愛してやまない人たちが、遭難したり命を落としている。エレベストのデス・ゾーン（標高8,000m以上）には、数百人もの遺体が今も放置されている。けいさんも過酷な登攀を通じて、幾度となく命の危険にさらされていたに違いない。

カメット南東壁の登攀ルートの六日目の日記には、（「太陽のかけら」一七七頁）

「バナナクローワール（バナナの形をした岩溝）の雪壁をひたすら登るも、やっぱり長い**酸欠で何度も死じゃうかって思った**、平出君のステップをたどっていても、**もう一人誰かいる気が何度もした。誰？　まだ呼ばないでね。**こんなに苦しいのははじめて。一人じゃ歩けない。サミット（山の頂上や最高峰）たどり着けず」と書き残していた。

けいさんは、ここで【もう一人誰かいる】と書いている。これは**【サードマン】**といわれる現象であったかも知れない。ジョン　ガイガー　（著）「サードマン・奇跡の生還へ導く人」（新潮文庫）には、山での遭難、洋上を漂流、災害現場などで、死が迫っている危機的状況・極限の状況におかれた人の傍らに突然現れ、励まし、助言を与え生還へと導く。不思議な現象によって命を救われた多くの人たちの事例が紹介されている。

この【サードマン】現象で思い出されるのは、死者・不明者一万八千人余りを出した東北大震災の遺族が語る霊的体験談である。現代人は、**再現性のない現象は、非科学的で、単なる妄想や迷信に過ぎない**と切り捨て・排除してしまう。しかし奥野修司氏の「魂でもいいからそばにいて3.11後の霊体験を聞く」(新潮文庫)に書かれている**遺族が語る霊的体験談**を、読んでみると、こうした物語(体験談)は妄想や作り話ではなく、遺族にとっては事実であったに違いない。

奥野氏は、「不思議な体験が語られるのは、大切な『**亡き人との再会**』ともいえる体験だった。同時にそれは、**亡き人から生者へのメッセージ**ともいえた。語る事で死者とともに生きる意味を見出すきっかけではないだろうか」

そして「霊があるとか、無いとかは、証明はできない。だが**人間は、合理性だけで生きているのではなくて、非合理性の存在でもあること**に気づいてほしい」そういった意味を受け入れる社会であってほしいとの思いを込めて書いたと述べられている。

けいさん自らも、そして毎年山仲間が一人、また一人山で命を落としていく、その度に「山では死なない」と心の中で幾度となく繰り返してきた。本書の解説で野口健氏は、「仲間の死が、よりリアリティーをもって死と向かい合わせる。**頭で感じる死と感覚で感じる死とではまるで違う**。死を感じれば感じるほどに死が怖くなる。・・・山が怖くなる・・同時に、志半ばで逝った仲間の分まで生きなければならないと感じる。**僕ら**にとっては、**生きるとは、山に登ることなのだ・・・**」(「太陽のかけら」三五二頁)

唯川恵著「一瞬でいい 下」(新潮文庫)三七二頁)の解説「本日も山から物語は始まる」の中でけいさんは、

「**死に触れる度に、生を尊く思う。**そんなの、こんな人生、いいのかどうかも分からないけど、**生の素晴らしさと大切さを実感できる自分で良かった**と、つくづく思う。**生きられなかった人の分まで**、私は欲張りに生きたいな。すべての**一瞬一瞬を、逃したくない**と思うのだ。」と、彼女の死生観・人生観が短い文章に凝縮されている。

そこには、頭や観念で考えたり、仏典に書いてあるどうのこうのと言う死生観では、なくて実践と体験に基づいた死生観あるいは、人生観なのである。

山ヤ仲間であった鈴木啓紀氏は、「**彼女が残してくれた**エネルギーの破片はまだたしかに**僕のなかで生きていて**、ときに僕を叱咤(しった)し、勇気づけ、背中を押してくれる。まるで熾火(おきび)のように」(「太陽のかけら」三三〇頁)と語っている。

本書の著者大石氏も、「生前、まるで太陽のように私たちを照らしてくれたけいは、**いまも心のなかで輝き続けていた。太陽のかけらが、私たちのなかで燃えていた**」と述べている。

彼女に関わりをもった人たちが、異口同音(いくどうおん)に、その生き方・行動に魅了され。影響を受けていたことが、本書には詳述されている。あまり【女性】を意識させない人だった。しかし喪(うしな)って初めて彼女を愛していたことに気づいた人も多かった。

本書を読んで、またYouTubeにアップされている動画を観ると、不思議にその魅力に惹(ひ)かれてしまう、人間的に素敵な女性であったに違いない。

■■■■

海転落 内灘の23歳死亡

仙台港、停泊の捕鯨船乗組員

13日午後11時20分ごろ、仙台市宮城野区の仙台港に停泊していた共同船舶(東京)の捕鯨母船「日新丸」から、内灘町千鳥台の乗組員菅原崇臣さん(23)が海に転落した。宮城海上保安部によると、約1時間半後に海中で発見され、搬送先の病院で死亡が確認された。死因は溺死だった。

宮城海保によると、当時菅原さんは作業を終え、救命胴衣を着けていなかった。菅原さんは船内で飲酒し気分が悪くなり、甲板に出て転落したと別の乗組員が説明しているという。

共同船舶は2019年に国内で31年ぶりに再開された商業捕鯨で、唯一沖合操業を手がける。同社によると、船は6月に広島を出航し、三陸沖や北海道東沖で捕鯨。水揚げのため今月13日に仙台港に入港していた。

マグロ船の機関長目指し転職の矢先

関係者によると、菅原さんは遠洋マグロ船の仕事に憧れ、17歳の時に宮城県の漁業会社に就職した。マグロ船で太平洋西域などを巡り、日本人やインドネシア人の船員と一緒に漁を行っていた。

2級海技士の資格を得て機関長になることを目指した菅原さんは今春、資格取得に必要な大型船での実務経験を積める共同船舶に転職。夢に向かって歩み始めた矢先の事故だった。

宮城県の漁業会社への就職をあっせんした同県北部船主協会付属船員職業安定所の吉田鶴男事務局長は「もの静かな性格だが、向学心の強い子だった。将来は宮城県に戻って、またマグロ船に乗るつもりだったと思う。残念でならない」と言葉を詰まらせた。

【北国新聞】記事(2022.9.14)

2022年9月14日早朝、今は亡き娘から携帯に電話がかかってきた。「**崇臣(たかおみ)が死んだ！**」今新幹線

※三級海技士（機関）免許部分

で、仙台に向かっている・・・すみれ（妹）も大阪から向かっている・・」冷静を装った声が今でも耳底に残っている。それから一週間、悲嘆の中で葬儀を、仙台の地でおこなってきた。

谷口けいさんと初孫の崇臣君の生きざまが、重なって脳裏から離れない。

地元の県立高校に入学して暫くして、高校生活に疑問を抱くようになった。

多分谷口けいさんと同様「大学進学目的だけに、今この大切な時間をつまらない勉強のために、費やしてしまうなんて、バカみたい・・フツーて、どういうことなのか？**フツーの生き方て何だろうか。何の為に生きているか？**いまやりたい事は、なんだろう？どれだけ自分の力で生きていけるのか、自分に挑戦すること」そんな思いを抱くようになったのではないだろうか。

自分の選択した道をを歩むためには、けいさんと同様【出家】して親には経済的負担をかけずに、土日には、アルバイト。そして将来役に立つと思しき、英語や理数学の勉強は怠らなかった。

三年生になって、貯めたアルバイト代で、九州まで夜行バスに乗り就職説明会に出向き、「高校卒業してから就業すべき」との新聞記事にもある吉田さんの助言にも拘わらず、崇臣君の熱意に負けて、高校を休学扱いで、遠洋マグロ漁船に乗船する事になった。会社の就業面接で、**【期間採用**で良いですネ**】**と聞かれた時、崇臣君は**【機関で採用**されたと**】**了解した。国家資格の海技士の受験には、数年間の乗船実務経験が必須条件。その傍ら受験勉強は、船室に残されていた専門書などから、彼なりの独自の流儀で独学していた。

合格率三割の三級海技士（機関）試験に一発で合格。昨年には二級の海技士の学科試験にパスして、大型船での乗船実務を残すにのみであった。そんな最中の事故であった、死因は、新聞記事には溺死とあるが、引き金になったのは、けいさんと同じ「脳挫傷」だった。

「漁船と並走してイルカが泳いでいる・パナマ運河を航行・ガラパゴス諸島に入港・・」小生が体験したことない世界を見ていたに違いない。「この地球に生きているのは人間だけじゃない」崇臣君の遺品や、彼女（恋人？）と楽しく食事している写真を見ると。やりたい事は実現してきた、後悔はしていなかったと思う。勿論まだまだ、やりたい事はたくさんあったに違いなかったが、二十三年間の小生など真似のできない、充実した濃厚な有意義な楽しい人生であったに違いない。

「崇臣は二十三歳で、**いのち終える星（運命）のもとに生まれてきた**」

突然息子を亡くした母親は、自らを納得させるように、そしてその言葉の裏には、「**残された人は、しっかりと前を向いて生きていこう**」そんな決意でもあったと思う。

その母親（娘）も孫の百ケ日忌を待たずして、十二月一日「くも膜下出血」で孫のところへ旅立ってしまった。四十八歳の生涯であった。

前述した奥野氏は、「**人は物語を生きる動物**」であると言われた。肉親の死によって切断された物語を、亡くなった人を通じて、残された人は、紡ぎ直していく。それが孫と娘に対する供養ではないかと思うのである。

※中国の道綽（562～645）『安楽集』

「前に生まれん者は後を導き、
後に生まれん者は前を訪え」

※道元禅師

「生は死である　死が生である」
「生を諦める者が死を諦める」

諦め「明らかにする・発見する意味」

報恩講勤修

令和５年１１月９日（木）

午前１０：００～

勤行・お説教・おとき